

郷土らがさき



第 144 号

発行 平成31年1月1日
 発行者 茅ヶ崎郷土会
 会長 平野文明
 編集責任 平野文明

伊勢参宮道中で欽三たちが訪ねた社寺	芹澤七十郎	2
柳島小学校(開校と五十周年式典)	羽切信夫	13
史跡・文化財めぐり報告 源 邦章	14
風(自由投稿欄) シロ、お前もか 中島幸子	16
四十六回茅ヶ崎市郷土芸能大会	K・K	17
名和稔雄さんを偲ぶ 羽切信夫	18

まずクイズです。今年の郷土芸能大会のアンケートに答えた人の中で、最も多かった年齢層は何だったでしょう。

答え。八〇歳代が三三%、七〇代が二八%、六〇代が二二%。八〇歳世代が市民活動になう世の中になってきました。

お浄土に向かう時期は阿弥陀様にお任せですが、私もあと十年足らず生きるとすれば八〇歳。「どう生きるか」にも、少しは頭を回さなければいけないのかなと思ってきました。

かつこよく生きたいです。映画俳優の宮口精二さんと笠智衆さんがあがれです。着流し姿でステッキを持った姿が目には焼き付いています。しかし、自分が和服を着たらまるで七五三と気づき、まねするのは止めました。

むかし伊勢参りが今より盛んだったころ、内宮と外宮の間の雑踏の中に小屋掛けして三味線を弾き、歌を歌い、踊りを見せる二人の少女がいたそうです。見物人は喜んで一文銭を投げつけますが、バチで払いヒョイ ヒョイと顔をかわして一つも身には当てません。それが見事で二人の足もとには銭の山。

こんな風に、ヒョイ ヒョイと生きればいいなあ。

今年も茅ヶ崎郷土会を「最真に願います。」
 平成三十一年一月 茅ヶ崎郷土会会長 平野文明

文久二年（一八六二）の伊勢参宮道中で藤間欽三たちが訪ねた社寺

芹澤七十郎

江戸時代になると庶民のお伊勢参りが盛んになる。その江戸時代も後半期には、参宮をした人たちの中に、旅立ちから帰着するまでの道中記録を書き残した人々があらわれる。茅ヶ崎市内の事例は次の二件を茅ヶ崎市史関係資料で読むことができる。

一、文久二年（一八六二）一月十三日出立、三月十八日帰着

柳島村 藤間欽三筆

同行七人（南湖 江戸屋金次郎・南湖 藤屋大五郎・南湖 八左衛門・浜之郷村 林右衛門・田蔵村 豊治郎・柳島村 欽三・一之宮村 作左衛門） お供を四人従えていた。なお、藤間欽三は柳島村の藤間善五郎柳庵の養子として、藤間家の家督を継いだ人物である。

道順は東海道を上り、掛川から秋葉街道で秋葉神社、鳳来寺、豊川宿で東海道に戻り、追分で伊勢街道に入り伊勢参宮、初瀬街道から奈良、吉野、高野山、高野街道を堺、大阪と進み、西国街道、山陽道を西宮、神戸、明石、高砂、姫路、岡山、倉敷、船で香川県亀山に渡り金刀比羅神社参詣、船で大阪に戻り、淀川を遡って宇治、京都、比叡山、大津とたどり、草津から東海道に沿って茅ヶ崎に帰る。六五日を要している。

『茅ヶ崎市史研究』一〇号（昭和五十二年茅ヶ崎市刊）『伊勢道中日記』について『圭室文雄』。以下「日記」と記す。

なお、右の文章では、要した日数を六六日としているが、私が

数えたところ六五日となる。船中泊の数え方で違いが出たものと思われるが、皆さんの確認をお願いしたい。

二、文久二年十二月十九日出立、文久三年一月二十五日帰着、

茅ヶ崎村本村 伊藤喜左衛門筆

同行一七人、内一〇人は伊勢参宮の後茅ヶ崎に向かい、喜左衛門を含む残り七人は、奈良、高野山、堺、大阪、京都、大津と進み、帰路は東海道をたどって豊川から鳳来寺、秋葉神社を経て、再び東海道の掛川に出て茅ヶ崎に帰り、三六日を要している

『茅ヶ崎市史』1 近世編五七四頁（二五四号史料）。この史料は『寒川町史』10 寺院編でも取り上げている。

この二つの道中記録には幾つかの同異があるが、異なる点を一つだけ述べると、前者は先方で参拝した社寺を細かく記していること、後者は要した金銭を、これも細かく記していることである。

ここでは、資料一について、一行がどこでどのような社寺にお詣りしたかを抜き出して、それらが現在の何という寺院、神社に当たるかを想定してみた。明治初年の神仏分離令を受けて全国の社寺は大きく変わっているから、江戸時代と現在は、簡単には結びつかないのである。私も訪れたことのある社寺もあって、楽しい作業だった。ネット情報を頼りに進めたが、この作業を文献だけで行うとなると大変な時間を要したと思われる。

資料一を紹介した圭室文雄氏は、その文章の中で、江戸時代の庶民の伊勢参宮の目的は二つ指摘できて、一つは伊勢神宮参拝、二つは観光旅行だったと述べている(69〜70頁)。そして欽三たちの道中旅行は「第一の目的と第二の目的が完全に逆転しており、現在のわれわれの観光旅行と変わらなかったといえよう」としている。

江戸時代の庶民の社寺参拝道中が現在の私たちの観光旅行と似ていることはそのとおりであると思う。しかし観光旅行抜き、信心をもつぱらとする参拝道中というものがあるとするのなら、それはどのようなものだろうか。観音霊場や四国八十八ヶ所霊場巡りを指すのだろうか。それらであっても観光旅行のおもむきが無かったわけではないだろう。江戸時代の参拝道中が現在の観光旅行と変わらないのなら、それこそが昔も今も変わらない日本人の信仰生活ではないのかと考えるのである。欽三たちが約二ヶ月を掛けて回った先はほとんどが社寺であった。私には、信心半分観光半分の道中であつたように見える。そこから何が得られたのか、次に考えてみたいテーマである。

算用数字は便宜的に付したものである。引用元の表記はゴシック体とした。(W) はフリー百科事典『ウィキペディア

(Wikipedia)』の略号。「Ⅱ」の下に現在の社寺名、所在地、簡単な説明を付した。

「日記」の記述には当て字が多い。誤記かなと思われる文字もあるが原本には当たっていない。時間を追って書いてあるが混乱している所もあり、意味が分からない所もある。意味が分かったところは「説明」の中に書いておいたが、紙面の都合で、「日記」中の記事は省き、社寺の名称だけしか記さなかった。『茅ヶ

崎市史研究』二号掲載の「伊勢道中日記」と合わせて読んでいただきたい。

○一月十三日 茅ヶ崎を出立

○一月十四日 二日目

1 箱根権現参詣Ⅱ箱根神社(神奈川県足柄下郡箱根町元箱根) 三所権現(法躰・俗躰・女躰)を祭っていたが、神仏分離後は瓊瓊杵尊・木花咲耶姫命・彦火火出見尊を祭神としている。(三島宿泊まり)

○一月十六日 四日目

2 龍けん寺江参詣Ⅱ日蓮宗龍華寺(りゅうげじ)。(静岡県静岡市清水区村松)。「龍けん寺」は「龍華寺」の間違い。「日記」にサボテン、ソテツを見たところがあるが、これらは今も名所である。

3 久能山江参詣Ⅱ久能山東照宮(静岡県駿河区根古屋)。徳川家康の遺命によりその遺骸を葬った場所に作られた。

4 府中浅間江参詣Ⅱ静岡浅間神社(静岡市葵区)。駿河国総社、静岡の総氏神、駿河の大社として広く信仰されている(神社HP)。(府中宿泊まり)

○一月十九日 七日目

5 秋葉山参りⅡ秋葉山本宮秋葉神社(浜松市天竜区春野町領家)。火防に験ありと広く信仰された。神仏分離前は秋葉権現と称した。ここと鳳来寺を結ぶ秋葉街道・鳳来寺道は東海道の裏道として広く使われていた。伊藤清左衛門も帰りに通っている。(秋葉坂下泊まり)

○一月二十一日 九日目

6 鳳来寺参詣Ⅱ真言宗鳳来寺(愛知県新城市門谷字鳳来寺)。

江戸時代は徳川家の庇護をうけ寺勢を誇っていた。(新城泊まり)

○一月二十二日 十日目

7 豊川稻荷様へ参詣 曹洞宗圓福山妙嚴寺(豊川市豊川町)。

豊川吒枳尼眞天を祭る稻荷社(豊川稻荷)は妙嚴寺の鎮守で、現世利益の効で広く信仰される(寺HP)。(藤川宿泊まり)

○一月二十三日 十一日目

8 池鯉鮒明神へ参詣 知立神社(知立市西町神田)。江戸時代

には池鯉鮒大明神として知られ、蝮除け・長虫除け・雨乞・安産の神として信仰された(W)。祭神ウガヤフキアエズノミコト、ヒコホデミノミコト(ウガヤフキアエズの父)、タマヨリビメノミコト(ウガヤフキアエズの妻)。カムヤマトイワレヒコノミコト(神武天皇、ウガヤフキアエズの子)。境内に親母神社(ウバジンジャ、玉依比売)を祭る(W)。(宮宿泊まり)

○一月二十五日 十三日目

9 白子(しろこ)観音江参詣 真言宗白子山観音寺(三重県鈴鹿市寺家)。本尊は白衣観世音菩薩。安産、子孫長久の子安観音

として信仰を集めている(W)。(白子宿泊まり)

○一月二十六日 十四日目

10 津 国府ノ阿弥陀参詣 真言宗恵日山観音寺(津市大門)。

本尊は聖観音菩薩。「国府ノ阿弥陀」は江戸に出開帳したことから知られ、神宮参宮の往復に参拝者が増えた(W)。(松阪宿泊まり)

○一月二十八日 十六日目

伊勢に到着

11 二タ見 二見浦(三重県伊勢市二見町)。

12 大神宮参詣 伊勢神宮 皇大神宮(内宮 伊勢市宇治館町)。

祭神は天照大御神。豊受大神宮(外宮 伊勢市豊川町)。祭神は豊受大御神。(御師の宿に泊まり)

○一月二十九日 十七日目

13 お宮廻り 当時内宮・外宮の境内には小さなお社が林立

して盛んに参拝客を呼んでいた。それを二つずつ回ってわず

か数文ずつの賽銭をあげた。(御師に泊まり)

○一月三十日 十八日目

14 太々神楽を奉納 (御師に泊まり)

○二月一日 十九日目

15 一之木神宮行御馳走

二成 欽三たちの御師は伊勢市一之木町に館を構えていた。この館を「一之木神宮」と呼んだらしい。(御師に泊まり)

○二月二日 二十日目

16 とば湊之見物 (御師に泊まり)

○二月三日 二十一日目

杉木権太夫屋方出立 御師の名は杉木権太夫。(新条宿・場所未調査 泊まり)

○二月六日 二十四日目

17 時頼公身植松 不明

○二月六日 二十四日目

18 弥勒菩薩へ参詣 楊



伊勢神宮 内宮の参道



伊勢神宮 外宮

柳山大野寺 (奈良県宇陀市室生大野)。宇陀川の対岸の石英安山岩に刻まれた高さ一三・八メートルの壮大な弥勒如来立像(磨崖仏)がある。

19 長谷十一面観世音詣

真言宗豊山派神楽院長谷寺(桜井市初瀬)。本尊は十一面観音。(初瀬泊まり)

○二月七日 二十五日目

20 御霊様へ参詣 御霊神社(奈良市薬師堂町)。西

紀寺町の崇道天皇社とともに南都二大御霊社とされる。

21 がんぐう寺塔江参詣

奈良時代の元興寺は大きな勢力を持っていたが中世以来次第に衰退し、江戸時代にはその一部が真言律宗元興寺極楽坊(奈良市中院町)本尊は智光曼荼羅(西大寺末寺)と華嚴宗元興寺観音堂(奈良市芝新町)本尊は十一面観音(東大寺末寺)などとして残っていた。後者の元興寺観音堂には五重塔もあったが安政六年(一八五九)に観音堂とともに焼失した(W)。「日記」は文久二年(一八六二)だから一行が到着したときには観音堂の塔はなかったことになるので、「がんぐう寺塔」とは何のことだろうか。

22 南円堂四国九番札所参詣 興福寺南円堂(奈良市登大路

町)。本尊、不空罽索観音。西国三十三所観音霊場第九番札所。

23 大仏、東大寺 二月堂 三月堂 四月堂 華嚴宗大本山東大寺(奈良市雑司町)。本尊は盧舎那仏(国宝)。

24 春日大神宮参詣 春日大社(奈良市春日野町)。

25 薪の御能光福寺にて拝見 法相宗大本山興福寺(奈良市登大路町)で薪能見物。本尊は釈迦如来。室町時代の五重塔は国宝。奈良時代に作られた梵鐘があり国宝になっているが今は使われていない模様。「日記」に五重塔と大鐘を見たとある。(奈良泊まり)

○二月八日 二十六日目

26 西国十七番札所法華寺参詣 奈良市法華寺町の光明宗法華

寺と思われる。本尊は光明皇后の姿を写す十一面観音。しかし「日記」が記す西国三十三所観音霊場は京都市東山区の六波羅蜜寺で、混乱が見られる。

27 西大寺 真言律宗西大寺(奈良市西大寺芝町)。本尊は釈

迦如来。重文の十一面観音像がある。

28 菅原天神参詣 菅原天満宮(奈良市菅原東町)。

29 别当喜光寺 法相宗清涼山喜光寺(奈良市菅原町)本尊、阿弥陀如来。僧、行基が没した地とされている(W)。「别当」とあるのは菅原天神の别当寺という意味だろうか。

30 正大本寺本尊釈迦如来 律宗唐招提寺(奈良市五条町)。

本尊は盧舎那仏で記載に混乱が見られる。

31 西之京阿弥陀如来、薬師如来 法相宗薬師寺(奈良市西ノ

京町)のことと思われる。本尊は薬師如来。

32 法龍寺 聖徳宗法隆寺(奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山

内)。金堂に釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来を本尊として安置

する (w)。一行は五重塔も見ている。

33 龍田明神へ参詣 龍田 (たつた) 神社 (生駒郡斑鳩町龍田)。法隆寺の鎮守とされる。元々の社名は「龍田比古龍田比女神社」で、龍田比古神・龍田比女神の二神 (龍田大明神) を祭っていた。現在は天御柱命・國御柱命を主祭神とし、龍田比古神・龍田比女神を配祀している (w)。

34 染井寺 浄土宗石光寺 (せつこうじ) 奈良県葛城市染井。本尊は阿弥陀如来。中将姫伝説ゆかりの寺院である。境内には中将姫が蓮糸曼荼羅を織成する際に蓮糸を染めたという井戸「染めの井」と、糸を干したという「糸掛桜」があり、「染寺」と通称されている (w)。一行はこれらを見ている。

35 当麻寺北宝院 高野山真言宗・浄土宗一上山当麻寺 (葛城市當麻)。信仰の中心は中将姫が織ったという当麻曼荼羅。「日記」には曼荼羅が開帳されていたとある。奈良時代と平安時代初期建立の二基の三重塔 (東塔・西塔、共に国宝) がある。(w)。北方院については不明、子院の一つだったのだろうか。(下田：奈良県香芝市下田 泊まり)

○二月九日 二十七日目
36 多武峯大織官鎌足公 談山神社 (桜井市多武峯)。奈良時代、藤原鎌足の墓所に妙楽寺が作られ、のちに多武峯寺と称していたが、神仏分離後は談山神社となった。祭神は藤原鎌足。(四間茶：場所未調査 泊まり)

○二月十日 二十八日目
37 蔵王権現 金峰山修験本宗金峯山寺蔵王堂 (吉野郡吉野町吉野山)。三体の蔵王権現像を祭る。役小角開基と伝える。

38 吉水院 (きつすいいん) 参詣 吉水神社 (よしみずじんじ

や吉野郡吉野町吉野山)。神仏分離までは金峰山寺 (きんぷせんじ) の僧坊だった。神仏分離後吉水神社となる。源義経が追われて潜み、後醍醐天皇が行宮としたことで有名。

39 よしつね背拔塔 蹴抜きの塔 (すぐ近くに金峯神社：吉野郡吉野町吉野山) がある。隠れていた義経がこの塔の屋根を蹴破って逃走したと言われている。

40 役行者 「日記」に蹴抜きの塔からさらに五〇丁 (約五四五〇^米) 登った所の役行者とあるが不明。(宇野村泊まり)
○二月十一日 二十九日目

41 かるかやの堂 刈萱堂 (和歌山県伊都郡高野町高野山)。密厳院 (真義真言宗を起こした覚鑿上人ゆかりの寺) の前にある。説経節の「刈萱」をもつて高野信仰を広めた高野聖の道場だった。欽三たちの参拝は翌日十二日だったかも知れない。(かわら宿：場所未調査 泊まり)
○二月十二日 三十日目

42 奥の院江参詣 一行が訪れた諸大名旗本の墓・無明橋・蛇柳・姿見の井戸は今も高野山の名所で大勢の人たちが訪れている。

43 慈眼院 相模国には、この慈眼院か高室院の檀家が多く、檀家は登拝の



義経 蹴抜きの塔 (吉野町)

際、どちらかの自分の坊に宿泊した。慈眼院は廃寺となり高室院に合併された。

(高野 慈眼院泊まり)

○二月十四日 三十二日目

44 妙国寺 日蓮宗妙国寺 (大阪府堺市堺地区材木町)。境内にあるソテツは当時から有名で国指定天然記念物。

45 なにわかかさ松 難波屋の笠松 (大阪府大阪市住之江区安立一丁目)。当時有名だったが今はない。

46 住吉大明神 住吉大社 (大阪府住吉区住吉)。今もある誕生石を見ている。

47 一心院 浄土宗松阪山高岳院一心寺 (大阪府天王寺区)。

48 天王寺 四天王寺 (同市天王寺区四天王寺)。聖徳太子建立。

49 妙法寺 法華宗妙法寺 (大阪府中央区谷町)。松が有名だった。(堺泊まり)

○二月十五日 三十三日目

50 御城見物 大阪城 (大阪府中央区大阪城)。

51 天満天神 大阪天満宮 (大阪府北区天神橋二丁目)。

52 仁徳天皇参詣 仁徳天皇陵 (堺市堺区大仙町)。全国で最大規模の巨大古墳。

53 鴻之池町御霊社参り 鴻池町は東大阪市にあるがそこに御霊神社はなく、大阪府中央区淡路町に御霊神社がある。「日記」

には神社名の横に「道頓堀芝居町通り」と書いている。道頓堀は中央区にあり、翌日の芝居も道頓堀で見ているので、淡路町御霊社とするべきところを間違ったものと思われる。(堺泊まり)

○二月十六日 三十四日目

54 大阪道頓堀で芝居見物 (堺泊まり)

○二月十七日 三十五日目

55 松原山昌林寺 浄土宗昌林寺 (兵庫県西宮市津門西口町)。延暦寺の僧源賢が幸寿丸の菩提のため建立と伝える。原賢

は幼名を美丈丸といい、父多田満仲の怒りを買って首を切られようとしたところ、重臣 藤原仲光の子、幸寿丸が身代わりとなった。四天王の一人の源頼光は満仲の長男で、鬼の酒呑童子を退治

したことで有名。(http://biterecup.web.fc2.com/)。一行は寺内にあるこれらの遺跡を見ている。「日記」の「幸寿丸身代」は

「幸寿丸身代(身代わり)」。 (西宮泊まり)

○二月十八日 三十六日目

56 西之宮太神宮 恵日須 すさのふの尊三社参詣 西宮神社 (西宮市社家町一番)。第一殿に蛭見大神、第二殿に天照大神、第三殿に須佐之男大神を祭る (HPより) ので「三社参詣」と記したと思われる。

57 住吉村住吉四社明神江参詣 神戸市の本住吉神社か (兵庫県神戸市東灘区住吉宮町七丁目)。住吉神社は底筒男命・中筒男命・表筒男命 (住吉三神) および神功皇后を主祭神とする場合が多いので「住吉四社」と称する。

58 生田大神言 生田神社 (神戸市中央区下山手通二丁目)。「大神言」は「太神宮」の誤記。主祭神は稚日女尊。「日記」に境内にあると書かれている「海老良の桜」は「景季箴(えびら)の梅」、「神功皇后ノ竹」は「弁慶の竹」、「阿川盛の萩」は「敦盛の萩」のこと。今もある (神社HP)。

59 楠公墓 楠木正成を祭神とする湊川神社 (神戸市中央区多聞通三丁目) は明治五年創建だが、以前から境内の東南隅に楠公

の墓と言われる一角があった。元禄五年(一六九二)に徳川家光が建てた「楠公之墓」の碑がある(神社HP)。

60 兵庫筑嶋寺

不明。

61 来光寺

浄土真宗来光寺(神戸市西区神出町)。詳細不明。

62 大道場真光寺

時宗西月山真光寺(神戸市兵庫区松原通一丁目)。一遍上人中興開祖とする。一遍上人はここで亡くなり廟所がある(寺HP)。

63 須磨寺上野山福善寺

真言宗須磨寺派上野山福祥寺(神戸市須磨区須磨寺町四丁目)。「福善寺」は正しくは「福祥寺」。本尊は海中出現の聖観世音菩薩像。境内には義経の腰掛松や敦盛の首塚、弁慶の鐘など源平ゆかりの史跡や芭蕉などの文学碑が点在する。宝物館では敦盛愛用の「青葉の笛」などを展示(HP)。

64 山田庄原野村安善寺

「安善寺」は「安養寺」。現、神戸市北区山田町原野にあったが今は無い。武蔵坊弁慶が長刀の先に掛けたと言われる鐘があったが須磨寺に移されている。寺跡に室町時代の宝篋印塔・五輪塔がある。(摂津名所図会 <http://bittrcup.web.fc2.com/>)。

65 敦盛ノ石塔

(神戸市須磨区一ノ谷町五丁目)に敦盛塚があり、そのそばに敦盛そばを食べさせる店が今もある(須磨観光協会のHP)。「日記」に敦盛そばのことを記している。

66 明石人丸社参詣

柿本神社(かきのもとじんじや)(兵庫県明石市人丸町一丁目)。柿本人麿を祭神とする。人麿は明石について「天離(あまざか)る夷(ひな)の長通(ながぢ)ゆ恋ひ来(く)れば明石の門(と)より大和島(やまとしま)見ゆ万葉集卷三(二五五)」と詠んでいる。元和六年(一六二〇年)、明

石城主だった小笠原忠政が人麿を歌聖として崇敬し、この地に祭った(神社HP)。

67 别当人丸山月照寺

曹洞宗人丸山月照寺(明石市人丸町一丁目)。本尊は十一面観音。神仏分離前は人丸社の别当寺。「日記」にある八房の梅は今もあり、赤穂四十七士の一人、間瀬久太夫正明が大石内蔵助と参詣し、成就を祈り、持参の鉢植えの梅を手植したもの。一つの花に八つの実がなる(HP)。「日記」の「めくらの杖の桜」は不明。

68 忠盛公墓

不明。平忠盛の子忠度(ただのり)の墓なら明石市天文町にある(w及び http://www.akashi.tv/detail/index_73.html)。忠度とすべきを忠盛と間違えたか。(明石宿泊まり) 〇二月十九日 三十七日目

69 别府住吉四社明神参詣

別府住吉神社(兵庫県加古川市別府町東町)。「日記」の「頼光手植え松」は境内の「手枕の松」の間違いか。また近隣各地には浜宮天神社に「官公お手植えの松」、尾上神社に「尾上の松」、高砂神社に「相生の松」、曾根天神社に「曾根の松」などがある(加古川観光協会HP)。

70 浜宮天神宮

浜宮天神社(加古川市尾上町口里)。「日記」の「加古松」は「官公お手植えの松」のこと。

71 尾上住吉明神

尾上神社(加古川市尾上町長田字尾上林)。境内に謡曲「高砂」に謡われた尾上の松がある。(神社HP)。「日記」でここに記す「片枝の松」は70の松のことか。

72 高砂牛頭天王社

高砂神社(兵庫県高砂市高砂町東宮町)。境内に、一つの根から雌雄の幹をもつ松が生え、尉(伊弉諾尊)と姥(伊弉册尊)が宿る相生の松と称された(w)。

- 73 別当宮歌すいん 不明。高砂牛頭天王の別当寺のことか。
- 74 石宝殿 生石神社(おうしこじんじや)の石宝殿(高砂市阿弥陀町生石)。石の宝殿と呼ばれる巨大な石造物を神体とする。この巨石が水面に浮かんでいるように見えることから「浮石」とも呼ばれる。このことを「日記」は「下の廻りに水あり」と書いている。誰が何の目的でどのように作ったかはわかっていない(w)。
- 75 淡嶋大明神大黒天江参詣 不明
- 76 曾根天神社 曾根天満宮(高砂市曾根町)道真手植えの曾根の松がある。これが曾根の松で、現在も幹が保存されている(神社HP)。(姫路泊まり)
- 二月二十二日目 四十日目
- 77 楡伽山 真言宗由加山蓮台寺(岡山県倉敷市児島由加)。本尊は十一面観音。江戸時代には、由加山の楡伽大権現と讃岐国の金毘羅大権現(現金刀比羅宮)を参拝する両参りの慣習があった(w)。一行も両者を参詣している。(船中泊)
- 二月二十三日 四十一日目
- 78 象頭山参詣 香川県三豊市と善通寺市にまたがる象頭山、三豊市と琴平町にまたがる琴平山は隣接しており、一緒に象頭山あるいは琴平山と呼ばれる。琴平山に金刀比羅宮(ことひらぐう)がある。神仏分離以前は真言宗の象頭山松尾寺金光院、象頭山金毘羅大権現と呼ばれていた。今も海上交通の守り神として信仰されており、漁師、船員など海事関係者の崇敬を集めている。江戸時代に金毘羅参りが盛んだった。境内には諸社が祭られている。一行が見物した絵馬堂は今もありたくさんの絵馬が架かっている。
- 79 善通寺弘法大師誕生寺 真言宗屏風浦五岳山誕生院善通寺(香川県善通寺市善通寺町三丁目)。本尊は薬師如来。四国八ヶ所霊場の第七五番。伽藍は創建地である東院(善通寺)と、空海生誕地とされる西院(御誕生院)に分かれている。江戸時代まで両者は別の寺院であったが、明治初年に単一の寺院となった(w)。(船中泊)
- 二月二十六日 四十四日目
- 80 石清水八幡宮参詣 石清水八幡宮(京都府八幡市八幡高坊)。祭神の八幡大神は中御前(菅田別命)・西御前(比咩大神)・東御前(息長帯姫命)・神功皇后)。社殿屋根の金の樋が有名で一行はこれを見ている。
- 81 平等院参詣 朝日山平等院(京都府宇治市宇治蓮華)。本尊は阿弥陀如来。一行が見た源三位頼政の墓は鳳凰堂裏手の不動堂境内にある。
- 82 浮島之塔 国指定重要文化財浮島十三重石塔(京都府立宇治公園塔の島)。
- 83 離宮大神参詣 離宮八幡宮(京都府乙訓郡大山崎町)。この地が嵯峨天皇の離宮「河陽(かや)離宮」跡であったので社名を離宮八幡宮と称した(w)。石清水八幡宮の元宮と言われている。
- 84 朝日山真心院 真言宗智山派朝日山恵心院(宇治市宇治山田)。本尊は十一面観音。「真心院」は「恵心院」の誤記。
- 85 興聖寺参詣 曹洞宗仏徳山興聖寺(宇治市宇治山田)。本尊釈迦三尊。
- 86 三室戸寺 本山修験宗明星山三室戸寺(宇治市菟道滋賀谷)。本尊は千手観音。西国三十三所第一〇番の観音霊場。「日

記」に一部分を記すこの霊場の「詠歌は「夜もすがら月をみむろとわけゆけば 宇治の川瀬にたつはしらなみ」。

87 黄檗宗万福寺参詣 黄檗宗大本山黄檗山満萬福寺 (宇治市五ヶ庄三番割)。本尊は釈迦如来。

88 藤森天王参詣 藤森神社 (ふじのもりじんじや) (京都市伏見区深草鳥居崎町)。主祭神は素盞鳴命。藤森天王社とも言われる (w)。

89 日本一之惣本社稻荷大明神参詣 伏見稻荷大社 (京都市伏見区深草藪之内町)。祭神は田中大神、佐田彦大神、宇迦之御魂大神、大宮能大神、四大神の五柱を一字に祭る。全国に約三万社あるといわれる稻荷神社の総本社。(神社のHP)。

90 東福寺 臨済宗恵日山東福寺 (京都市東山区本町)。本尊釈迦如来。盛期には多くの塔頭があった。「松屋吉兵衛」と宿名しか記していないが京都泊まりと思われる。○二月二十七日 四十五日目

91 知恩院宮御所拜見 浄土宗総本山華頂山知恩院大谷寺 (京都市東山区林下町)。本尊は法然上人像 (本堂)、阿弥陀如来 (阿弥陀堂)、開基は法然。知恩院は門跡寺院だから門主の御所が公開されていたのだろうか。

92 祇園牛頭天王参詣 祇園八坂神社 (京都市東山区祇園町北側)。慶応四年(一八六八)に八坂神社と改称するまで、感神院または祇園社と称した。現在の祭神は素戔嗚尊、櫛稲田姫命、八柱御子神など (神社HP)。神仏分離前の祭神は中の座に牛頭天王、東の座に八王子、西の座に頗梨采女 (w)。

93 八坂五重塔参詣 臨済宗霊心山法観禅寺 (京都市東山区清水八坂上町)。八坂の塔として今も観光名所の一つ。本尊は薬師

如来。現在の塔は永享八年(一四三六年)の焼失後、同十二年に足利義教の援助により再建されたもの (w)。

94 清水観音 北法相宗音羽山清水寺 (京都市東山区清水一丁目)。本尊は千手観音。西国三十三所観音霊場第一六番。清水の舞台として知られる本堂は国宝。徳川家光の寄進により寛永十年(一六三三年)に再建された (w)。

95 三十三間堂参詣 蓮華王院本堂が正式名称。(京都市東山区三十三間堂廻町)。本尊は千手観音。東山区にある天台宗妙法院の境外仏堂で、同院が所有・管理している。元は後白河上皇が自身の離宮内に創建した仏堂 (w)。

96 東本願寺 真宗大谷派本山真宗本廟 (京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町)。中心になる建物は御影堂。現在の建物は明治十三年(一八八〇)に起工し、同二十八年(一八九五)の完成。瓦の枚数は一七万五九六七枚 (w)。「日記」には千八百枚とあるが、当時から瓦数が話題となっていたのだろうか。(京都泊まり) ○二月二十八日 四十六日目

97 六角堂 紫雲山頂法寺 (京都市中京区六角通東洞院西入堂之前町)。本尊は秘仏の如意輪観音。西国三十三所観音霊場第一八番札所。本堂が平面六角形であることから六角堂の通称で知られる。華道の池坊の発祥の地としても知られる (w)。

98 東山南禅寺 臨済宗南禅寺派大本山瑞龍山太平興国南禅禅寺 (京都市左京区南禅寺福地町)。本尊は釈迦如来。京都五山および鎌倉五山の上におかれる別格扱いの寺院で、日本の全ての禅寺のなかで最も高い格式をもつ (w)。歌舞伎の『楼門五三桐』中、南禅寺の山門で石川五右衛門が「絶景かな! 絶景かな!」という科白を廻すことから寺名が知られている。

- 99 黒谷寺** 浄土宗紫雲山金戒光明寺 (京都市左京区黒谷町)。本尊は阿弥陀如来。法然上人が比叡山黒谷の青龍寺での修行の後、この地に移った事から新黒谷と呼ばれていた。その後黒谷、黒谷さんなどと呼ばれた。法然上人座像を祭る御影堂の横に熊谷直実と平敦盛の五輪塔と、直実の鎧を掛けたという松が、何代か植え替えられて今もある (w)。直実は法然上人によって出家したとされることから、御影堂のそばにあるのであろう。「日記」に熊谷堂とあるのは上人の御影堂の間違いと思われる。
- 100 口光大師へ参詣** 不明
- 101 真如堂参詣** 天台宗鈴聲山 (れいしやうざん) 真正極楽寺 (京都市左京区浄土寺真如町)。本尊阿弥陀如来。真如堂は通称。
- 92 祇園牛頭天王** 前日二十七日に参拝している。重複。
- 102 吉田社江参詣** 吉田神社 (京都市左京区吉田神楽岡町)。祭神、建御賀豆智命・伊波比主命・天之子八根命・比売神。貞観元年 (八五九年) 奈良の春日大社四座の神を勧請して創始。室町時代末期に吉田兼俱が吉田神道を創始しその拠点となった。寛永五年 (一六六五)、江戸幕府により吉田家は全国の神社の神職の任免権 (神道裁許状) などを与えられ、明治になるまで神道界に大きな権威を持った (w)。「日記」に「日本六十六ヶ国神祭有」と書いている。
- 103 船岡山** 船岡山公園 (京都市北区)。平安時代から景勝の地、また葬送の場所として知られていた。近くに大徳寺、今宮神社がある。金閣寺も近い。
- 104 紫野** 紫野 (京都市北区)。船岡山の北方の地名。
- 105 大徳寺参詣** 臨済宗大徳寺派大本山 (京都市北区紫野大徳寺町)。本尊は釈迦如来。有数の規模を誇る禅宗寺院。茶の湯文化とも縁が深い。
- 106 白川御所、禁裏御座敷、日の御門、南門、西御公家門拜見** 京都御所 (上京区上京区京都御苑)。
- 107 今宮大神宮江参詣** 今宮神社 (京都市北区紫野今宮町)。祭神は大己貴命・事代主命・奇稻田姫命。長保三年 (一一〇〇) に疫病が流行したことから、朝廷は疫神を船岡山から移し、神殿・玉垣・神輿を造らせて今宮社と名付けた (w)。
- 108 金閣寺見物** 臨済宗相国寺派北山鹿苑寺 (京都市北区金閣寺町)。相国寺の山外塔頭寺院。本尊は観音菩薩 (w)。
- 109 平野社参詣** 京都市北区平野宮本町。祭神は今木皇大神・久度大神 (くなどのおおかみ)・古開大神・比売大神 (w)。
- 110 北の天神参詣** 北野天満宮 (京都市上京区馬喰町)。主祭神は菅原道真公。(京都市泊まり)
- 二月二十九日 四十七日目
- 111 比叡山** 京都市府と滋賀県大津市にまたがる。山上に延暦寺、ふもとの大津市坂本に日吉大社がある。山中の東塔、西塔、横川、そのほかの地に諸寺院がある。
- 112 釈迦堂参詣** 西塔の転法輪堂のことか。釈迦堂とも呼ばれている。
- 113 宋輪寺** 不明。
- 114 法華堂** 東塔の法華総持院のことか。
- 115 當行堂** 西塔の不在堂のことか。
- 116 傳教大師参詣** 西塔の伝教大師最澄の廟所、浄土院のことか。



弁慶の引きずり鐘
三井寺 (大津市)

117 開壇堂 東塔の戒壇院のことと思われる。

118 講堂 今、東塔にある大講堂は昭和の建立だが、この地には最澄入寂後から講堂があった。

119 中堂本尊大日如来 東塔の根本中堂のことと思われる。五智如来を祭る。根本中堂は延暦寺の総本堂。

120 坂本山王貳拾一社参詣 日吉大社 (大津市坂本五丁目)。神仏分離以前は山王権現と呼ばれ、山王二十一社を主祭神としていた。

121 近江唐崎大明神江参詣 唐崎神社 (大津市唐崎一丁目)。日吉大社の摂社で近江八景のひとつ「唐崎の夜雨」で知られる景勝地。芭蕉の「辛崎の松は花より朧にて」という句で知ら

れる巨大な霊松が境内にある。(滋賀県観光情報のHP)。

122 三井寺参詣 天台寺門宗総本山長等山 (ながらさん) 園城寺 (大津市園城寺町)。本尊は秘仏の弥勒菩薩を金堂に祭る。

弁慶の引きずり鐘 (奈良時代)、近江八景の三井の晚鐘 (桃山時代)、寺名の由来となっている三井の霊泉などが有名。観音堂は西国三十三所観音霊場の第一四番目の礼所。

123 勢多の唐橋見物 (石山宿泊まり)
以後は東海道を通って帰路となる。

○三月二日 四十九日目

124 鈴鹿明神参詣 片山神社 (三重県亀山市関町坂下)。現在の祭神は倭姫命など。江戸時代刊行の『伊勢参宮名所図会』の

「鈴鹿山」に、鈴鹿峠の鏡岩を挟んで伊勢側に鈴鹿神社、近江側に田村明神が描かれていて「鈴鹿神社には片山神社、縣主(あがたぬし)の神社といった別名があった」(W)。(坂下宿泊まり)
○三月四日 五十一日目

125 津嶋牛頭天王 津島神社 (愛知県津島市神明町)。江戸時代までは津嶋牛頭天王社と呼ばれて牛頭天王を祭神とした。現在の祭神は建速須佐之男命。

126 熱田太神宮 熱田神宮 (名古屋市中熱田区神宮一丁目)。主祭神は熱田大神。御神体は草薙剣。(宮宿泊まり)

このあとに社寺参詣の記事はなく、三月十八日、六十五日目に茅ヶ崎に到着している。

(藤間欽三が記した社寺などを、現在のそれと引き比べたのだが、間違いなどありましたらお知らせ頂けるとありがたいです。)

(平成三十年十二月記)

柳島小学校 開校時のこと、五十周年記念式典のこと

羽切信夫

茅ヶ崎市立柳島小学校は、昭和四十四年（一九六九）年四月に西浜小学校と鶴嶺小学校から学区を分離して市内十三番目の小学校として柳島地区の西側の農地を買収して開校した。学校の所在地は茅ヶ崎市柳島一五九四番地で、校地の面積は二三〇六二平方メートル。学校の南側と西側は農地、北側は小出川、東側は市道で、南西には本年（平成三十一年）四月にオープンした茅ヶ崎市立柳島スポーツ公園がある。

開校時の児童は、六年生がいなくて一〜五年生のみで七九七人だった。学区は、中島・柳島・柳島海岸・松尾および浜見平団地一〜一〇街区だった。児童数の変遷は、昭和六十年（一九八五）ころは約一六〇〇人だったが、学区内の浜見平団地の少子高齢化などにより減少し、平成三十年（二〇一八）五月一日現在では六一一人である。

開校まで中島・柳島および松尾地区の児童は、鶴嶺小学校に、浜見平団地および柳島海岸の児童は西浜小学校に通学していた。

昭和三十九年（一九六四）に浜見平団地（約三三〇〇戸）が建設されたが、茅ヶ崎市の財政事情もあり単独校は建設されず、西浜小学校に通学していた。しかし、鶴嶺小学校も西浜小学校も千

人を超える大規模校となり、プレハブ校舎などで対処していたが、鶴嶺小学校と西浜小学校の PTA や関係自治会などの新校舎建設の声が大きくなり、ようやく昭和四十四年（一九六九）四月に柳島小学校が開校された。

現在の学区は、開校時の学区のほか、平成元年（一九八八）に建設されたエクシード団地（今宿）と平成十年（一九九八）に建設されたベルパーク団地（中島・今宿）である。この両団地は今宿地区内にもかかり鶴嶺小学校の学区内だが、同校の児童数が千人を超えていたため柳島小学校の学区内になったものである。

創立五十周年記念式典が平成三十年（二〇一八）十月二十七日、柳島小学校体育施設で開催された。創立五十周年のスローガンは「柳のようにたくましく 未来に進めやなぎしま」であった。田野口和加子校長は、この式典で「五十周年スローガンのように、今日の式典を機に、力を尽くしてくださった方々への感謝の気持ちを持ち、自分たちの学校をこれまで以上に大切にして欲しいと思います」と力強く挨拶された。

(二〇一八年十一月十一日記)

史跡・文化財めぐり報告

第二八九回 茅ヶ崎市内の別荘地巡り

その第三回 「中海岸の鉄砲道から南へ」

源 邦章

平成三十年九月十六日(日) 参加者 二六名

今回は箕作一族の直系の箕作麟祥、箕作元八、菊池大麓や女婿の美濃部達吉、大島浩等を中心に鉄砲道より南を歩きます。その間に茅ヶ崎館や国木田独歩の追憶碑も訪れます。

九時一五分茅ヶ崎市図書館に集合し一時間程、本日巡る別荘地の人々の話をしました。その後図書館の前の高砂通りを南下、一番目の目的地、現恵泉幼稚園がある「中村楼」の旧跡を訪れました。中村楼は東京の江東中村楼が茅ヶ崎に支店として出店、高級な旅館、料理店として当地ではかなり有名でした。次いでその北側に浮田別荘跡がありました。浮田和民は熊本藩士の子で生家は宇喜多秀家の末裔と言われています。熊本洋学校、同志社を経て東京専門学校(現早稲田大学)で大隈重信のブレンとして活躍していました。さらに進むと箕作麟祥別荘跡に着きます。麟祥は箕作一族の直系で創業者箕作阮甫の孫。箕作一族は阮甫から始まり男子がいないと、優秀な人材を養子にして一族を繁栄に導きました。明治以来博士号を取得した人物は二百人を下らないと言われています。今回この箕作一族は前述した以外の人でも、榎有恒、坪井正五郎、長岡半太郎、鳩山秀夫、末広巖太郎等の逸材がおり

ます。その後軍人の石本別荘跡、大蔵高官の今村別荘跡を通り箕作一族の菊池大麓別荘跡を訪れました。菊池大麓はイギリス留学後数学、物理学を学び東京帝大、京都帝大総長を経て文部大臣となった人です。

秋田出羽久保田藩の殿さま佐竹別荘跡を経て美濃部達吉別荘跡に着きました。美濃部達吉は「天皇機関説」を唱えたため、この論争には勝ちましたが、軍部と対立し非難されました。戦後東京都知事を務めた美濃部亮吉は達吉の息子です。次いで宮内次官で、時の大臣の土方久元の紹介で茅ヶ崎に別荘を構えた花房別荘跡やお茶で有名な松平不昧公の子孫の松平基則別荘を通り、ここから東へ向かいました。しばらく歩きますと大島別荘跡に着きました。父の大島健一は陸軍中将や陸軍大臣を歴任、子の大島浩は陸軍大学校卒業後ドイツに赴任、ナチ党と強い絆を結び、そのため日独同盟、三国同盟を推進しました。戦後はA級戦犯となりました。原三溪の兄の原鉄太郎別荘跡を通って「茅ヶ崎館」に到着しました。ここは明治三一年茅ヶ崎駅開業の翌年の三二年に創業した老舗旅館です。当時は川上一座の「オセロ」等の舞台稽古場として使われていました。また戦後には映画監督の小津安二郎がここを仕事場として「東京物語」などの脚本を執筆しました。

次いで加藤時次郎別荘に到着しました。ここは広大な敷地を有し、現在でも東京の「海渡」の社長の別荘となっています。加藤時次郎は社会主義思想を持ち、始めて実費診療を行った人物。実費診療とは医療代を実費のみとして通常の医療代の三分の一から

四分の一の費用で行っていました。その後箕作一族の箕作元八別荘跡に到着。箕作元八は、最初は動物学を学ぶも近視が進行したため歴史学に移りました。フランスに留学しフランス革命史を研究、東京帝大教授となり西洋史学の確立に尽力しました。外国人の別荘のゼーリッヒ別荘跡、フォンゴツホ別荘跡が当時並んでいましたので、世間では「ドイツ人村」と呼ばれていました。

最後に海岸へ出て野球場の片隅にある「国木田独歩追憶碑」を見ました。碑文の「永劫の海に落ちてゆく 世世代代の人の流れが僕の前に横たわって居る」は独歩の「渚」から斎藤昌三が撰文し構成したとの事でした。揮毫者は文化勲章受章者で茅ヶ崎文化人クラブ初代会長の牧野英一博士です。ここで解散しましたが、有志の人々と共に第一回で訪れた「高砂緑地」を三〇分程で案内してこの日の史跡巡りは終わりました。

第二九〇回 茅ヶ崎市内の別荘地巡り

第四回 ラチエン通りからゆかりの人物館へ

源 邦章

平成三十年十一月十八日(日) 参加者二一名

今回の目玉は團十郎別荘跡と茅ヶ崎ゆかりの人物館の訪問です。いつもですと、図書館等で別荘地巡りをする前に別荘人の紹介をするのですが、今回は海岸コミセンで集合しそこで紹介するはずでした。しかし当日は市長選挙と市議会議員補欠選挙が行われ、海岸コミセンが選挙会場となったため使用できなくなりまし

た。そこで別荘人紹介は最終訪問地の茅ヶ崎ゆかりの人物館の一室を借りて行うことにしました。

海岸コミセンに集合後歩き始めましたが、その海岸コミセンのある場所が仁井田別荘です。当初は軍医総監の石黒忠恵(のり)が土地のみを購入していましたが、法学博士の仁井田益太郎が購入、本年夏まで住宅がありました。鉄砲道を西に向かい旧道に入る角に佐々木(卯之助)追悼記念碑が建っています。明治三十一年、時の茅ヶ崎村長の伊藤里之助が南湖の六道の辻に建てました。その後転々として現在地には昭和五十六年に移転されました。反転して旧鉄砲道を東に向かうと直ぐに小橋別荘があります。小橋一太は内務官僚で文部大臣、東京市長を歴任、茅ヶ崎では銅板葺きの屋根を持つ最初の建物だそうです。多少は変更されていますが今でも別荘の形を保っています。小橋別荘より旧道を挟んで斜め前にイサムノグチ別荘跡があります。当初はイサムの母親がイサムと住んだ場所です。イサムノグチは彫刻家、画家、インテリアデザイナー、造園家、舞台芸術家として世界的に有名な人物です。

鉄砲道旧道からラチエン通りに出て北上、すぐ右側に公園があります。そこは中泉別荘跡です。中泉正は西洋医学所で学び最終的には軍医監になった人物で、茅ヶ崎で明治四十一年ごろに別荘を建築しました。公園脇には中泉別荘の標石が今でも残っています。ラチエン通りを北上し藤井別荘跡を過ぎるとラチエン別荘跡に着きます。今でもラチエンという表札が架かっている場所を見学しました。ラチエンはドイツ人で貿易商として来日、ドイツの製品を輸入、その他では青山にポリドルレコードの録音所を経営していました。戦後は夫人と共に茅ヶ崎に住み、昭和二十二年

に亡くなりました。現在のラチエン通りに多数の桜の木を植えたことで「ラチエン通り」と名付けられました。そこからラチエン通りを南下、再び鉄砲道を東に向かって歩きますと、田中銀行創設者の田中別荘跡、中島飛行機(後の富士重工)を創った中島知久平別荘跡、そしてドライクリーニングの白洋舎を創設した五十嵐健治別荘跡を通り、鉄砲道を左折して平和町公園に着き一休みしました。ここで明治時代の湘南の別荘地における先行別荘地(大磯、鎌倉、逗子、鶴沼等)に対して茅ヶ崎は後発別荘地であることの説明をしました。

そこから再び鉄砲道に戻るとそこは「團十郎山の碑」がある場所でした。平成三年に建てられたこの碑の一角が茅ヶ崎別荘の先駆者九代目市川團十郎の別荘跡です。まだ茅ヶ崎に駅が開設される前に團十郎は静かな場所に別荘地が欲しいと考え、物色していたところ茅ヶ崎を紹介され購入しました。総面積は六千坪以上

風 自由投稿欄

シロ、お前もか

中島幸子

ありました。團十郎死後別荘は関東大震災で倒壊、再建されることはありませんでした。團十郎に影響を受けて茅ヶ崎に別荘を購入した人物に土方久元、菊池大麓、川上音二郎等がおりました。

その後鉄砲道を横切り南下していきますと、宮内省の大場別荘跡、医学博士で眼科医の甲野別荘跡を過ぎて竹内別荘に到着しました。竹内綱は土佐出身で維新時活躍し、その後経済界でも活躍、衆院議員にも当選しました。その長男が竹内明太郎で小松製作所を創設しました。五男が吉田家に養子に出された吉田茂です。ここより西へ向かい、外国人の別荘地ダイセリツチとゾルゲがおりその西側に日新聞の論説委員を長く務めた笠信太郎の家がありました。そこを通過して再度ラチエン通りにでますと直ぐに茅ヶ崎ゆかりの人物館があります。ここが最終目的地でその一室を借りて「民話の会」の人々による團十郎の民話と別荘人の紹介をしました。

「人間万事塞翁が馬」のたとえは、生きるものすべてにあてはまるなあ。あくせく生きていくのに、猫の生き様をのんきに眺めているなんて矛盾しているかな。

シロは長く付き合っている猫である。
隣の主が「いつもすいません。なかなか死ななくて、こいつもう二十年もいるんです」という。話が通じないからと言って何

という言いぐさなのだ。二十年生きていけばシロも茶や灰や象牙色にもなる。だが、猫の寿命ってそんなに長かったかしら。主は漁師で、網や魚を入れる物置のついた木造の家に住んでいた。雑然とした小屋は夏の陽も、冷たい雪も凌げて、猫には快適そうだった。

小柄なシロは少々汚れてもさすがに茅ヶ崎小町、ボーイフレンドの人気を集めて早い春から賑やかに混声合唱を奏でていた。

ところが、家がレンガ張りのマンションに建て替えられてしまったのだ。シロには一言の相談も無く、夏の昼寝はともかく雪が降ったらどうするのだろう。

幸い借家の一軒が餌を頼まれたらしい。

隣人としては、食べるものがなくても探すだろうと思いつながらも見殺しにはできない。たまにイワシの頭をやった後、のどが乾くだらうと水もやったこともある。

茅ヶ崎郷土会 活動報告

第四十六回 茅ヶ崎市郷土芸能大会

K・K

十一月二十五日(日)、茅ヶ崎市郷土芸能大会が、十月一日にリニューアルオープンした市民文化会館小ホールで行われた。この芸能大会は、市教育委員会が茅ヶ崎郷土芸能保存協会に委託して毎年開催している。茅ヶ崎郷土会も保存協会の役員を掛け持ち

夏が来て冬も巡っていった。雪の日はずいぶん心配したが、風邪をひいた様子もなく、夏痩せもせず、軒もひさしもないマンションで淡々と自立していた。

朝、庭に出ると「ニヤア」という。オヤツ、象牙でも茶色でもない。純白のコスチュームである。シロかもしれないと凝視した。餌だけやっていた借家人が引越したが、次の人にタッチされたのだ。

ドアの外にタオルをたたんでのせた小さな籐椅子、キャットフードの入れ物と水の器、今まで見たこともないシロ用の蚊取り線香の缶が置いてある。あら、まあ…。

それに純白入浴のサービスマスまでついている。

万事塞翁が馬は人間に限らない。生きるものの条理だったのだ。

して大会を下支えしている。

当日は好天に恵まれ、十二時過ぎに圓藏祭囃子の華やかな触れ太鼓でスタートした。市民文化会館入口の階段上で演じられた触れ太鼓の響きは、多くの行きかう人たちの足を止めさせていた。

今年の大会は、十団体により十四演目が演じられ、子供たちから高齢者の皆様までが、三時間にわたり日頃の練習の成果を存分に発揮された。



円蔵祭囃子保存会による
触れ太鼓



南湖餅搗唄



柳島大漁船上げ唄

すこーしだけお年を召した演者の皆様、ハツラツと舞台上で躍動している姿は、私たちだけではなく多くの高齢者の皆様に元気を与えたと思われる。そして、伝統芸能の後継者不足が言われている中で、子供たちや若者の参加は関係者に希望と勇気を与えてくれた。特に、中島中学校のような学校単位での取り組みが、他の小・中学校にも拡がることを期待したい。

今年の出演は、県立茅ヶ崎高等学校文楽部、茅ヶ崎民話の会、茅ヶ崎レクリエーション民踊会、南湖餅搗唄保存会、南湖麦打唄保存会、芹沢焼米搗唄保存会（焼米搗唄とササラ盆唄）、上赤羽

訃報

名和稔雄さんを偲ぶ

副会長の小澤勝重さん手作りの野菜十数袋と、元副会長の斎藤茂吉さん手作りの宝船三艘が青木会長の進行で行われ、伝統芸能同様大いに盛り上がった。

また終演後、恒例の抽選会（保存協会の

根太鼓保存会（上赤羽根甚句と祭囃子）、圓蔵祭囃子保存会（祭囃子と岡崎部会（のばか踊り）、柳島大漁船上げ唄好友会、柳島エンコロ節保存会（柳島エンコロ節とお座敷甚句）の十団体だった。演目の一部を写真で紹介する。（会員の坂井源一さんと筆者撮影）。

羽切信夫

茅ヶ崎郷土会の相談役を務めておられた名和稔雄（なわとしお）さんが平成三十年（二〇一八）八月六日に逝去されました。同年六月十九日に、郷土会主催で「郷土歴史民俗勉強会」を行った折、名和さんは「南湖院の人々」という題で、約一時間、熱心に講演されました。講演のあと、私が「ご苦労さんでした」とねぎらうと、「今年の夏は酷暑でまいったが、今日は健康状態も良くて、話ができたと、いつものように温和な表情で微笑んでおられました。八十六歳で浄土へ旅立たれたのは、それからわずか一ヶ月半の後でした。

名和さんとは二十年くらい前に、当会の総会で始めてお会いしてからすぐに親しくお付き合いいただきました。郷土会の創立五十周年記念として『郷土らがさき』百号の歩み』（平成十六年九月）を発行したときに、副編集長を担当していた私は、名和さんに原稿をお願いしました。快く「茅ヶ崎街道筋史談あれこれ―懐島と大庭一族」というすばらしい文章を頂きました。

名和さんは平成二十年度（二〇〇八）から同二十八年度（二〇一六）まで当会の役員として監事と副会長を歴任され、その後は今日まで相談役として会の活動を見守っていただきました。

私が当会の会報「郷土らがさき」の編集責任者を務めているときに、原稿を依頼するといつも快く書いていただきました。また私が鉄道退職者会東京地方連合会の会長に就任して東京での仕事が増加したため、会報の編集責任者を辞任するに当たり、後任をお願いするとこれも快く引き受けていただきました。平成二十二年（二〇一〇）から二十八年まで六年間の長期にわたり編集責任者として積極的に活動を続けられました。

名和さんは、「郷土らがさき」に執筆された原稿を、後に『新

編 茅ヶ崎街道筋史談あれこれ』（作成時期不明、二三頁、B5 仮綴じ）としてまとめられました。内容を紹介しておきます。

①「大正時代に出土したいにしえの遺産」平成十四年一月 第九号

②「下寺尾の古代寺院」同年九月 第九五号

③「懐島と大庭一族」平成十六年九月（号数不明）

④「懐島 その後の知行主と二つの謎」同年九月 第一〇一号

⑤「江戸時代」昭和四十三年 第八二号

⑥「茅ヶ崎と江川太郎左衛門」平成十七年 第一〇二号

⑧「鉄砲場について」同年 第一〇三号

⑨「柳島沿岸に黒船が現れた幕末の世相」平成十八年 第一〇五号

⑩「茅ヶ崎にもお札が降る」平成十七年 第一〇四号

⑪「慶応から明治へ」平成十年 第八三号

⑫「鉄道、電信電話のはじめ」平成十二年 第八八号

⑬「明治三年頃出現したといわれる人力車」平成十二年 第八十九号

また、この印刷物に再掲されていない文章に、次のようなものがあります。

「茅ヶ崎海岸別荘譚―高砂の緑地に住んだ実業家」平成一九年 第一〇八号

「一人の神楽師の人生と神楽の歴史」同年 第一一〇号

「茅ヶ崎の郷土いろはカルタ（一）」平成二十年 第一一一号

「郷土いろはカルタ（二）」同年 第一一二号

「郷土いろはカルタ（三）」同年 第一一三号

「神仏分離令と社寺の動き」平成二十一年 第一一五号

「茅ヶ崎の地名いろいろ(一)」と「第三十七回茅ヶ崎郷土芸能

大会盛大に挙行」平成二十二年 第二一七号

「地名いろいろ(二)」同年 第二一八号

「東海道の松並木について」同年 第二一九号

「宝尽くしと『登像遺跡』プレート建立の機に」平成二十三年

第二二〇号

「諸誌による大地震と津波」と「浜降りと浜降祭の起源」平成二

十二年 第二二二号

「茅ヶ崎の自転車文化の発祥史」平成二十四年 第二二三号

「柳田国男と茅ヶ崎そして河童」と「下寺尾遺跡群出土品と関連

発掘を語るほか」同年 第二二四号

「大山信仰と茅ヶ崎の大山道」平成二十五年 第二二七号

「南湖院と杏雲堂―開院当初のいろいろ」平成二十六年 第二二

九号

「系図・年表から探る大岡忠相公の一面」同年九月 第二三二号

「相模国延喜式内社と論社など」平成二十七年 第二三三号

「懐島(大庭)景能ゆかりの地(館、城跡など)を巡る」同年

第二三四号

「茅ヶ崎古代遺跡、郡衙の出現そして衰退」平成二十八年 第一

三五号

茅ヶ崎郷土会のために種々の活動を続けていただきましたが、事情があつて、茅ヶ崎文化人クラブの会長におつきになることになり、平成二十八年度の本会の総会時に、副会長と会報の編集責任者の役を退かれました。その後名和さんは、茅ヶ崎文化人クラブの会長を続けられながら、茅ヶ崎稲門会(早稲田大学卒業生の懇親会)でも幅広く活動をしておられました。

名和さん、長い間お付き合いいただき、またご指導いただきましたことに對し、厚く感謝申し上げます。安らかにお休みください。
(二〇一八年十一月十一日記)

「郷土らがさき」143号 正誤表

2頁上段17行『国史下調』↓「国誌下調」、4頁上段9行(樋田豊広)↓樋田豊宏、同頁下段17行(むかおかりようすけ)↓むらおかりようすけ、5頁上段23行「国史下調べ」↓「国誌下調」、6頁下段7行「二体は」↓「一帯は」、9頁上段19行『国史下調』↓「国誌下調」、10頁上段17行(一・三三〇平方米)↓「一三三〇平方尺」、14頁下段5行(市史編集委員会)↓市史編集委員会、同頁下段6行(岩波新書一五三三)↓岩波新書一五三三、15頁下段11行(其作一族)↓箕作一族、21頁上段16行(中山介山)↓中里介山、二三頁表(中山介山)↓中里介山
(ウェブ版は修正済みです。)

【編集後記】

今年選挙の年。わが郷土会には県会・市会の議員の方々がおられます。名前を紹介すべきですが、残念ながら余白がなくなりました。皆さん！出馬される会員さんにご注目を。

当会の問題点の一つは、会のイベントに会員の参加が多くないことです。九〇人の所帯ですからもっと多くの参加が欲しいです。この会報への寄稿も、お誘いのためのよいアイデアを望みます。会のHPは茅ヶ崎郷土会を検索することで見ることができます。ホームページのURLは

<http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/> (意見)感想は平野(090-8173-8845)まで。